



若い人たちが産業の復興のために頑張っています

岩手県山田町は、カキとホタテの養殖がさかんな町です。「国際開発救援財団(FIDR)」が力を入れている活動のひとつが産業の復興を支援し、被災地の皆さんが安心して仕事ができ、生活できる環境を作ることです。漁業の復興は、観光産業にも結び付

いてきます。

若者が戻ってきた

東日本大震災前、山田町の殻付きカキの生産量は日本一を誇りました。しかし震災により、山田湾に設置されていた約4000台の養殖イカダが流され、陸にあった作業施設、機械、漁業用ロープなどの資材も流失しました。

漁業再生が復興の原動力

昨年から少しずつ、山田湾に黄色い養殖イカダが増えましたが、まだまだ震災前の状態には戻っていません。しかし若い漁師さんが中心となり、町のために毎日頑張っています。山田町に限らず沿岸の被災地では、都会に働きに出ていった若者が震災をきっかけに地元の魅力を再認識し、



大きな鉄板の上で蒸し焼きにした殻付きカキの食べ放題が楽しめる「三陸山田復興かき小屋」

昨シーズンは約7000人が訪れました。かき小屋のカキは、津波を乗り越えて生き残った奇跡のカキで、地元漁協が確保し、優先的にかき小屋に出荷してくれています。

復興の力になろうと戻ってくる話を聞きます。

カキは成長して食べられるようになるまで、2年から3年もかかります。そのため、また一から養殖イカダを作り、じっくり育てていかなければなりません。それには時間だけでなく、たくさんの費用もかかります。そこで費用を集めるために、漁師さんたちが積極的な取り組みを始めました。

カキオーナー制度

値段や仕組みは各グループによって少し異なりますが、1口あたり5000円から1万円

円を募金した人にカキオーナーになってもらいます。カキが十分に成長した2、3年後に、1口あたり20個から30個がオーナーの元に届く制度です。集まったお金は、養殖イカダなどの漁業資材や器材、養殖施設・設備の復旧のための費用として大切に使われます。

津波で流された「かき小屋」が昨年10月、「三陸山田復興かき小屋」として再オープンしました。40分間カキが食べ放題です(大人2500円、小学生1500円)。大きな鉄板の上で殻付きカキを豪快に蒸し焼きにし、観光客だけでなく地元の人からも大人気です。

わけて知恵を絞っています。2、3年後には再び、殻付きカキの生産量日本一の町になれるよう、山田町は頑張っています。

(FIDR職員・薄木浩一郎)

◇薄木浩一郎さん

1978年生まれ。2009年から11年まで、国際NGOの緊急救援担当として、ミャンマー(サイクロン)、インドネシア(地震)、パキスタン(洪水)で起きた自然災害の被災者に対する救援活動を行う。東日本大震災発生直後、FIDRに入団。現在、東日本大震災復興支援チームのプログラム・オフィサーとして、岩手県山田事務所に駐在。



震災日記から生まれた「青いこのぼりと白いカーネーション」

加藤登紀子さんの歌声で ふるさとテーマのアルバムに収録

「震災日記」をもとに作った「青いこのぼりと白いカーネーション」を加藤登紀子さんが歌い、収録したアルバム「登紀子旅情歌 風歌 KAZEUTA」(2500円、ユニバーサルミュージック合同会社)が発売されました。

「青いこのぼりと白いカーネーション」は、津波にさらわれてお父さんを亡くした小学6年生(当時)の男子の日記を読んだ加藤さんが作詞、作曲。うつみ宮土理さんに曲を提供し、昨年4月にCDが発売されました。

今回、加藤さんが新たに「青いこのぼ

りと白いカーネーション」をレコーディングしました。加藤さんのなめらかな力強い歌声が響きます。

加藤さんは、東日本大震災の被災地へ何度も足を運び、人々のふるさとへの思いを強く感じました。アルバムは「ふるさと」をキーワードに、新曲「風歌 KAZEUTA」のほか、代表曲の「知床旅情」や「琵琶湖周航の歌」「千の風になって」「ふるさと」などが収められています。

加藤さんは「音楽が風を運び、過去と未来をつなぐ。音楽が支えとなり、元気になってほしい」と話しています。

登紀子 風歌 KAZEUTA